

```

4 φ INPUT "KAMERA NO TAKASA H=" ;H
5 φ INPUT "KAMERA NO SYOUTEN-KYORI F=" ;F
6 φ INPUT "SHASIN-GYOU NO SHIHYOU-KAN NO NAGASA Mφ" ;Mφ
7 φ INPUT "KAMERA TO SHIHYO TONO KYORI D=" ;D
8 φ M=B/Mφ :L=SQR(D×D+(H-Mφ↑2)) :H=H-Hφ
9 φ PRINT TAB(5); "MIGIGAWA NO SHASIN NO X,Y-ZAHYOU"
10 φ INPUT "X,Y="XM,YM :PRINT
11 φ PRINT TAB(6); "(HIDARIGAWA) NO SHASIN NO X,Y-ZAHYOU"
12 φ INPUT "X,Y=XH,YH :PRINT
13 φ Px=XH-(XM) :Y=(YM+YH)/2
14 φ LP=F*(M-B/Px)
15 φ Hp=Hφ-D/L*(M*Y-LP*(F*Y-H/D))
16 φ DX=XH*(M-F*LP)
17 φ DY=1/D*(L*LP+(Hφ-HP)*H)
18 φ PRINT "C" ; "KEISAN-KTEKA" :PRINT
19 φ HP=INT(HP*1φφ)/1φφ :DX=INT(DX*1φφ)/1φφ :DY=INT(DY*1φφ)*1φφ
20 φ PRINT TAB(3); "HYOUKOU" ;HP :PRINT
21 φ PRINT TAB(3); "X-ZAHYOU" ;DX :PRINT
22 φ PRINT TAB(3); "Y-ZAHYOU" :DY :PRINT :PRINT
23 φ PRINT "サラニ ケイサン ヲ ツヅケマスカ? <Y> <N>"
24 φ GET A$ :IF A$="THEN" 24φ
25 φ IF A$="NO" THEN 27φ
26 φ GOTO 9φ
27 φ END

```

## チャシの形態分類に関するメモ

後藤秀彦

### I

チャシの研究は、1906年の「チャシ即ち蝦夷の砦」（河野、1906）と1958年の『網走市史上巻』（河野、1958）をもって全てを語れる状況が永い間続いていた。初期には、ローカルな活躍をしていた阿部正己や伊藤初太郎、斎藤米太郎らの研究者は存在したが、その内容は主として分布や形態の研究で、チャシ総体の大系を変えるほどのものではなかったし、一部を除けばローカル誌に発表される程度のものであった。

また、一般の研究者はそれ以上に「チャシ」などに眼を向けるよりは、よりポピュラーな縄文時代の土器や石器を注視し、それほどの関心を示すことはなく、漠然と「チャシ」という名の遺跡が

北海道に存在することを認めているにすぎなかつた。

1973年、北海道教育委員会は初めて全道規模の「チャシ分布調査」に着手し、現存のチャシの実数を把握した（北海道教育委員会、1976）。一方、釧路川流域史研究会も同年『釧路川流域の遺跡』（豊原ほか、1973）を発表し、全道に広がるチャシの地名表を作成した。これにより全道のチャシ研究は急速に盛んとなり、1980年の『日本城郭大系 1』の発刊、『アイヌ考古学』（宇田川、1980）と連なっていく。特に、『アイヌ考古学』は從来からのチャシに関する情報を整理し、考古学と民族学の立場からチャシと、当時の北海道の様相を分析した労作で、今後のチャシ研究、ひいて

は擦文文化以降の北海道の歴史を探るうえでの指標ともなるべきものである。

・このように、チャシの研究は近年において長足の進歩を見せているが、チャシの総論に関するものが多く、個別的なものは意外と少ないのが実体である。チャシに対する考古学的アプローチが少なく、データの僅少さがその原因となっているのであるが、今後緻密な分布調査と精密な測量図が公表されれば、また別な角度からのチャシ像が浮かびあがってくると思われる。

したがって、この小文ではチャシの分類に関し現在までに知れるところを記し、今後の研究の覚えにしたいと考えている。

## II

チャシの分類に関して、最初に発言したのは河野常吉である（1906）。この中で、「チャシの平面に於ける形状は概ね不規則なる楕円形、其他不規則なる円形なれども、又弧線直線より成れる不規則の三角形、又方形に属するもの等あり」と述べている。そして、これを主に立地の観点から「丘岬にあるもの」と「丘頂にあるもの」とに2大別している。これらは、いわゆる丘先式・面崖式と孤島式・丘頂式とにそれぞれ当ると思われるが、この段階で既に「立地」の面から分類が可能であることを示唆したことは、その後のチャシの分類・構造・形態の研究上大きな成果であった。

事実、河野常吉以後の研究者は、阿部正己をはじめ伊藤初太郎、名取武光、河野広道らはいずれも立地を基本とした分類を試みている。これらの学史上の変遷については、松田猛（1973）が詳説しているところであるが、現在一般に通有しているのは河野広道（1958）によるものである。

河野広道は、チャシ跡を

- A：丘先式 岬や丘の一端を弧状の溝で区切ったチャシコツで最も普通の型式
- B：面崖式 崖に面する台地の一部に半円形または四角形の溝を周らしたもの
- C：丘頂式 小丘の頂部に周溝を周らしたお供餅形のもの
- D：孤島式 湖中や湿地中に孤立している丘や島などをそのまま砦としているもの

に分類している。

河野のこの4分類は現在広く流布され、これに代わる研究は今のところない。しかし、これとは別に、立地の視点からモイ（moy）地形をそして形態の面からチャシの固有名詞を使用した型式分類を、藤本英夫（1976、1977）が試みている。いずれも、今までの視点にはなかったもので、特に後者についてはその全容が公開されることが期待されている。

## III

河野広道によるチャシの分類の主点は、立地である。この分類の方法は、一見細かな壕の入り方や周囲の景観などを無視して考えられているよう見える。個々のチャシの形態を仔細に観察していくと、ダイレクトに代入できないようなものがあることも事実である。しかし、逆に例えば、「面崖式のチャシ」と言われば、おおよその「壕の形態」や「周囲の景観」などは見当が付くのも事実である。それが、連結壕であるとか、前面に河川が流れ込んでいるとの説明があればより具体的なイメージが浮かぶまでになっている。

すなわち、この分類は単にチャシの立地を基礎にしているように見えるが、実はチャシ総体の構造をも含んでいる内容をもっている。そして、この立地要件は、つまり形態をも規定していると考えられる。しかし、逆に形態が立地を常に優先して規定しているとも言え、この立地と形態の連動が、チャシの型式分類への一つの大きな鍵となるようである。

通常、人間が一つの構築物を作ろうと考えると、最も基本となる認識は「○○のために」あるいは「○○の目的を達成するために」など、その構築物が具有する機能である。何らかの目的をもった構築物を作ることによって、何らかの目的が達成され、また達成に一步近づくのである。

すなわち、人間の認識の大前提是「○○のために」という、その構築物への期待であり、思いいれであろう。その期待を一つの構築物へ寄託し、運営して、「機能」が決定される。つまり、「機能」は人間の認識の具体的な所作の結果として生まれた構築物の姿である。

その機能を發揮し、維持するために設置位置と形態が考えられる。機能を十分に發揮するにふさわしい内容をもった構築物が可能な限りで追求さ

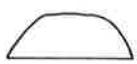
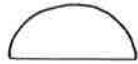
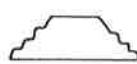
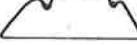
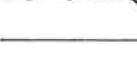
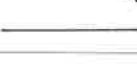
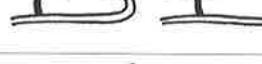
大別型式	細別型式	立面形・平面形	立地	特徴	具体例
I	-	  	独立丘、半独立丘、高い山の尾根部など	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤立丘の頂上を平坦に整地したもの</li> <li>壇造りのもの</li> <li>孤立丘の裾部を切ったもの</li> </ul>	川岸南(枝幸)チララレフシトウ(豊頃)齐藤(標茶)塘路(標茶)クンネベツ第2(陸別)
II	a	 	独立丘、半独立丘、高い山の尾根部など	<ul style="list-style-type: none"> <li>肩部に周壕をもつもの</li> </ul>	オタフンベ(浦幌)安骨(豊頃)丸山(茅室)クンネベツ第1(陸別)コタヌベツ(標茶)
	b	 	独立丘、半独立丘、高い山の尾根部など	<ul style="list-style-type: none"> <li>肩部の短軸方向に2本の壕があるもの</li> </ul>	チブネオコッペ(浦幌)
	c	 	独立丘、半独立丘、高い山の尾根部など	<ul style="list-style-type: none"> <li>肩部の短軸方向に1本の壕があるもの</li> </ul>	ウエンベツ(陸別)ポンビラ(標茶)チャランケ(標茶)
III	a	 	両側に沢などのある狭長な舌状台地上	<ul style="list-style-type: none"> <li>狭長な舌状台地上に1~2の直線壕と周壕をもつもの</li> </ul>	成人の森(陸別)オルベ(土幌)春苅古丹第1(羅臼)ピリカタイ(稚内)ポンカン(平取)
	b	 	両側に沢などのある狭長な舌状台地上	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が側面・前面にまでまわっているもの</li> </ul>	アツナイ(浦幌)シュトクンネ(千歳)
	c	 	両側に沢などのある狭長な舌状台地上	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が短軸方向に2本あるもの</li> </ul>	霧止山(浦幌)下土幌(音更)チエトイ(本別)ハッタルシップ(穂別)
	d	  	両側に沢などのある狭長な舌状台地上	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が短軸方向に1本、直線または弧状に入るものの</li> </ul>	帶富(浦幌)国見山(茅室)智恵文(名寄)高野(雄武)オビラルカ(穂別)
IV	a	 	IIIよりも広角な舌状台地上	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が1本弧状に入るもの</li> </ul>	相生B(音更)トライI(陸別)八幡(本別)サンペコタン(弟子屈)茂漁(恵庭)春苅古丹第2(羅臼)
	b	 	IIIよりも広角な舌状台地上	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が2本弧状に入るもの</li> </ul>	館山(伊達)
V	a	 	河岸段丘・海岸段丘などの縁辺部	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が1本半円状またはC字状に入るもの</li> </ul>	遠矢第1(釧路)十勝太D(浦幌)相生A(音更)恵茶人(浜中)中田牧場第2(鶴居)シラルトロ(標茶)
	b	  	河岸段丘・海岸段丘などの縁辺部	<ul style="list-style-type: none"> <li>半円状の壕が連結または同心円状に入るものの(パターン多し)</li> </ul>	十勝川口(浦幌)ツペツトウン(津別)ウヌイナスイ(津別)アオシマナイ(小清水)アッテウシ(千歳)トライII(陸別)
VI	a	 	河岸段丘・海岸段丘などの縁辺部	<ul style="list-style-type: none"> <li>壕が方形に入るものの</li> </ul>	桂恋方形(釧路)成人の森II(陸別)当幌(中標津)ピイラクニ(弟子屈)
	b	 	河岸段丘・海岸段丘などの縁辺部	<ul style="list-style-type: none"> <li>方形の壕の組合わさったものの(パターン多し)</li> </ul>	タブ山(標津)チャルコロモイ(根室)トーサムポロ3号(根室)コタンケシ1号(根室)

Fig. 1 チャシの形態分類

れるのである。機能から派生した、形態と位置の相関関係が型式的把握と編年的把握の基礎となる。のである。機能は、別に「用途」と置き換えられるかもしれない。

したがって、構築へのプロセスは次のように考えられる。



この、立地・形態・構造の相関は、相互に作用して一つのチャシを築造し、使用することとなるが、現在我々がこの限で確認できるのは、1～2のチャシを除き、前二者の立地と形態である。構造については、例えば釧路市桂恋フシコタンチャシ（澤・1975）や弟子屈町サンペコタンチャシ（澤・松田、1977）で壕に沿った柱穴の発見で柵列のあったことが証明されているほか、サンペコタンチャシでは、壕の途中に橋状遺構があったことが知られている。内部の種々の構造については、このほかに、櫓や住居の存在も予想されるが、現在的には不明と言わざるを得ない。チャシの発掘調査で顕著なのは夥しい数の柱穴（？）群である。この様相は、釧路町遠矢第2チャシ（北海道教育委員会、1975）など各チャシに共通するものであるが、これの分析が今後必要になってこよう。規則性が余り認められないことから、家屋等の構築物と考えるよりは、ヌササン、あるいはイナウなどを刺した穴跡と考えた方がより蓋然性があると思われる。

さて、我々が現在肉眼で観取できるのは、立地と形態の二者である。

立地は概ね、河川・海・湖沼・山岳との位置関係、比高、河川形態及びチャシの載っている面の状況等で検討される。こうした自然状況のほかにコタンや入会地、交通路等いわば人的な関係も考察される。

一方、形態は壕の入り方を中心に、沢や崖面との位置関係など、チャシとチャシをかこむ、ごく近接した地域の状況の検討となる。

こうした、チャシの立地と形態の組み合せがチャシの形態分類の基礎となる。これに、前述した構造がからみ、さらには歴史的な背景が問題となってこよう。15世紀以降の北海道は、前段からのアイヌの直接交易社会から日本封建制社会への改

編期でもあり、火山の噴火、津波、あるいはアイヌと和人の闘争も多く、非常に不安定要素の多い時期にあたる。

このような、諸要因をバックグラウンドとしてチャシが築造され、使用していたことに疑いはないが、チャシのオリジナルの形態を早期に把握し、その変遷過程を秩序付ける必要がある。そこには時代によるチャシの機能（用途）の変化と分化が予想されるが、同時にそれは形態や立地にまでも繁栄したであろう。Fig. 1は、河野（1958）の4分類を基礎として、形態を分類したものである。十勝管内のものを中心に組んでいるが、立地・形態の組み合せの基本パターンを摘出したものであり、今後資料の増加を待って再検証したいと考えているものである。（浦幌町郷土博物館学芸員）

### 引用文献

- 宇田川洋（1980）アイヌ考古学  
 河野常吉（1906）チャシ即ち蝦夷の砦、札幌博物  
 学会会報1-1  
 河野広道（1958）先史時代篇、網走市史、上  
 澤四郎（1975）釧路市桂恋フシコタンチャシ調  
 査報告  
 ——— 松田猛（1977）弟子屈町矢沢遺跡調査報  
 告——第1次調査——  
 豊原熙司ほか（1973）釧路川流域の遺跡  
 藤本英夫（1976）チャシについて（覚書）、北海  
 道考古学、12  
 ——— (1977) 北海道のチャシ、日本古代文化  
 の探求、城  
 北海道教育委員会（1975）遠矢第2チャシ跡遺跡  
 調査報告書  
 ——— (1976) 北海道のチャシ

1982年3月10日	印 刷
1982年3月20日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
發行責任者 家 村 克 行	
發行所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印刷所 大同出版紙業株式会社 (080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	